

---

# Loose Knot

sadaka

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

L o o s e   K n o t

### 【Nコード】

N 8 1 8 5 M

### 【作者名】

s a d a k a

### 【あらすじ】

中学生のマイとユウはご近所さん。のほほんとした二人の微妙な関係がちよつとずつ変わっていくかもしれない物語。

## 太陽のにおい（１）

春眠暁を覚えず、という言葉がある。これは、春の夜はとても眠り心地がいいので朝が来たことにも気付かず、つい寝過ごしてしまふという意味だ。春は陽気がいい。特に昼食が終わった後の五時間目は睡魔との闘いである。何度も経験したことがあるだけに、頼杖をつきながら黒板に目を向けている倉科マイは国語の教諭が滔々と語っている内容に密かな同意を示していた。

夏は、寝苦しい。朝となく夜となく、とにかく気温が下がらなければなかなか寝付けないものである。今がまさにその状態で、蒸し風呂状態の教室では生徒があちこちで下敷きを団扇代わりにして自分に風を送っていた。昼食が終わった後の五時間目、普段ならクラスの大半が睡魔と闘っている時間帯だが、生徒達の目は眠気ではなく暑さのために半眼になっている。そんな中にあって例に漏れず下敷きで自分を扇いでいたマイは、隣の席で熟睡している小笠原ユウにチラリと視線を傾けた。

春夏秋冬、朝昼晩。この小笠原ユウという人物はいつでもどこでも眠っている。春は、前述の理由から共感できる。秋は、陽射しが柔らかくて風が涼しいので同感だ。冬は、暖かい布団の中であれば頷ける。だが夏だけは、どうしてこの暑さの中で眠っていられるのか、マイには理解できなかった。

「ユウ」

授業が終わっても隣人が眠りこけていたため、マイはユウの肩を揺さぶった。教室には冷房がないのでマイも汗だくではあったが、ユウの体は寝汗に濡れている。

「ユウ、起きなよ」

少し手荒く、マイはユウを左右に揺する。すると鬱陶しいと言わんばかりに、ユウは不機嫌そうに体を起こした。

「なんだよ」

「授業、終わったよ」

マイが教えてあげるとユウは寝ぼけた様子で目を泳がせた。教室内の様子を確認したユウはまだ帰りのホームルームがあるというのに、すぐさま鞆に手をかける。マイは呆れながらユウのワイシャツの裾を引っ張った。

「ユウ、いいかげん起きなよ」

「ああ、まだか」

帰りのホームルームが済んでいないことによりやく気付いたように、ユウは浮かしかけていた腰を再び落ち着けた。椅子の背もたれに体重を預けたユウはそのまま頭を垂れる。前髪が邪魔でマイからは顔が見えなかったが、彼はまた瞼を下ろしてしまったようだった。マイとユウの関係は友達未満の『近所さん』である。小学三年生の時にユウがマイの家の隣の隣に越してきてから二人の微妙な関係は始まった。以来五年、友達と言うほど話もせず、ただの知り合いと言うほどお互いのことを知らないわけでもなく、マイとユウは気楽に付き合いを続けている。

その日の帰り道、マイはたまたま一人で歩いていたら、たまたま一人で歩いていたユウの後姿を発見した。どうせ向かう先は同じなので、マイはまだこちらに気付いていないユウの背中に向かって声をかけてみる。足を止めたユウは気怠げに振り返り、マイが追いつくのを待ってから再び歩き出した。

「ユウは夏休み、何するの？」

夏休みを三日後に控えていたのでマイの頭は長期休暇をどう過ごすかということについて悩んでいた。ユウは話しかけられたので答えているといった調子で重い口を開く。

「寝る」

ユウのこの答えは毎年恒例のものだった。彼が寝ると言ったら本当に寝るので、今年の夏も特に外出したりはしないのだろう。

「夜、寝られなくなるの？」

夏休みの話も盛り上がらなかったため、マイは常々疑問に思っ

いたことを切り出してみた。ユウは肩にかけていた鞆を面倒そうに下ろし、息を吐く。

「どうでもいいじゃん」

「……そうだね」

もともと話し込もうというつもりで問いかけたわけではなかったので、話の腰を折られるとマイはすぐに頷いた。わりと、どうでも良かったからだ。ユウもどうでもよさそうに、だらだらと歩く。

「じゃあ、また明日」

適当に話して適度に沈黙を続けているうちに家へ着いたので、マイは軽く手を振ってユウに別れを告げる。あいさつは返ってこなかったが、ユウは鞆を持っていない方の手をひらひらと振ると、マイの家から一軒先の自宅へと帰って行った。

子供同士の仲がいいからといって、その両親同士の仲もいいとは限らない。その逆もまた然りで、マイとユウの関係は微妙だが、双方の両親の仲はきわめて良好だった。

「明日？」

夏休みの初頭、麦茶を汲みにキッチンへと向かったマイはそこで母親に呼び止められて首を傾げていた。彼女達は明日から、旅行へ行くと言っているのである。前もって言っておいたはずだと母親は言っていたが、マイには寝耳に水の話だった。

「どこ行くの？」

「伊豆よ、伊豆。二泊三日で行ってくるから、あとのことはよろし

くね」

「へへ。行つてらっしゃい」

マイは自炊をするので、両親が家を空けることは苦でも何でもない。むしろ両親が留守ならば大つぴらに友達を呼べるため好都合である。しかしマイの企ては母親の鶴の一声によつてあえなく霧散することとなった。

「ユウちゃんのお世話もよろしくね」

ユウは家の手伝いなど一切しない。そのユウの両親を旅行に誘うため、すでにマイがすべてを引き受ける約束をしているのだという。「勝手に決めないでよ」

横暴な母親の振る舞いにマイは憤慨したが、娘の性質を熟知している彼女は財布から一万円札を取り出した。そしてそれを、これみよがしにマイの前に掲げて見せる。

「三日分の食費とユウちゃんのお世話代。余つたらお小遣いにしていいわよ」

鼻っ面に一万円札を吊り下げられたマイは馬になったような気分でごくりと喉を鳴らした。ユウの分の食事代も込みとはいえ、うまくやりくりすれば五千円以上が手元に残る。

「……わかった」

十四歳の苦学生にとって五千円は大金である。金欲に負け、マイは熟慮することなく母親に頷いて見せた。

## 太陽のにおい(2)

七月の下旬、マイとユウの両親、その他ご近所の仲良しグループは二泊三日の伊豆旅行へと出発した。当日の昼食からでいいとユウの母親に言われていたため、マイは正午の少し前に自宅から一軒先の小笠原家を訪れた。

(そういえば、ユウの家にあがるのって初めてだな)

ユウの母親から預かった鍵で玄関を開け、マイはユウの部屋があるだろう二階を目指した。一軒家の場合、子供部屋は上階にあることが多い。例に漏れずマイの部屋も二階にあるため、彼女はユウの部屋も二階だろうと安易な想像をしていたのだった。しかし二階に上がってみても、扉にはプレートらしきものがない。加えてどの扉も閉ざされていたため、マイは仕方なく一部屋ずつノックをしながら覗いて行くことにした。

「……ユウ？」

ユウの部屋と思しきインテリアの部屋はあったのだが、そこにもユウの姿はなかった。けっきょく二階にはいなかったため、マイはこもっていた夏の熱気を逃がしてから階下へと移動する。ひとまずキッチンに行こうとリビングに足を踏み入れたマイは、そこでユウの姿を発見した。さきほど換気をしてきた二階だけでなく、ユウのいる一階も窓は全て閉まっている。にもかかわらず冷房もつけず、ユウはリビングのソファで眠りこけていた。

(よくこんな中で寝られるなあ)

二階よりはマシだったものの、日陰部分の多い一階も十分に夏の太陽に熱せられている。息苦しくてたまらなかったマイはとりあえず窓を開け、それからユウのいるソファに近付いた。やはりこれだけ暑いと寝苦しいようで、ユウは顔を歪めながら眠っている。起こさないと死ぬかもしれないと思ったマイは、とりあえずユウの体を揺さぶってみることにした。

「ユウ、起きなよ」

しばらく呻き声を発し続けた後、ユウはゆっくりと目を開けた。泳いでいた視線がマイに固定されると、ユウは重そうな頭を抱えながらソファアの上で体を起こす。

「何で、いるんだ？」

「おばさんから聞いてないの？ 食事、つくりに来ただけだよ」

「……ああ……」

ユウが眠気を覚ますように頭を振ると汗が四方に飛び散った。すっかり直撃を食らってしまったマイは自分のものではない汗を手の甲で拭いながら呆れた声を出す。

「どんだけ汗かいてんのよ」

「……シャワー、浴びてくる」

のろのろとユウが立ち上がったので、マイは手短に昼食の注文を聞いた。何でもいいとの答えが返ってきたため冷やし中華で済ませることにして、マイはユウの家のキッチンへと向かう。夏場らしく、冷蔵庫には冷やし中華に必要な材料が一通り揃っていた。もしかするとこうなることを見越して、ユウの母親が残していつてくれた物かもしれない。気を遣う性質のユウの母親ならそのくらいのことはやりそうだと思いながら、マイはさっそく調理を開始した。

鍋にたっぷり水を汲み、まずはそれを火にかける。水が沸騰する間に用意するものは卵焼き・キュウリ・ハムだ。ささっと焼いた卵焼きから粗熱が取れるのを待つ間にキュウリやハムを刻み、少し冷えたら卵焼きも細長く刻む。トッピングが完成して麺を茹でる段階になるとシャワーから戻って来たユウがキッチンに姿を現した。

「美味そう」

「すぐできるから、リビングで待ってなよ」

料理は時間との闘いである。麺の固さを調節するのも揚げ物を力ラリと揚げるのも時間勝負だと思っているマイは、鍋から目を上げないままユウをリビングへと追いやった。マイが真剣であることを見て取ったのか、ユウは無言で彼女の言いつけに従う。その後、納

得のいく出来映えで冷やし中華を完成させたマイは、それをリビンググへ持つて行くと同時に悲鳴を上げた。

「ちょ、なんて格好してんの！」

「……下は履いてるじゃん」

「上！ 何でもいいから着てよ！」

上半身裸だったユウは渋々といった面持ちで腰を上げ、リビングから姿を消した。戻つて来た時にはＴシャツにハーフパンツと見られる格好になっていたため、マイはホツと息を吐く。

「暑いなら冷房入れれば？」

マイが提案してみてもユウは首を振りながら食卓についた。マイもそれほど暑いとは感じなかったので、それ以上は勧めずにユウの対面に腰を下ろす。食事をとっている間は特に会話もなかったため、静かな室内には麺をすすする音のみが響き渡っていた。

夕食は何かいいかとユウに尋ねたところ、またしても「何でもいい」との答えが返ってきた。ので、マイはカレーをつくることにして午後六時過ぎに近所のスーパーへと出掛けた。買物に費やした時間は約三十分。メニューはすでに決まっていたが店内が買い物客で賑わっていたため、レジで予想外の時間を食ってしまったのだ。小笠原家に辿り着いたのは午後七時になろうという頃だったのだが、ユウの家はマイが日中に見た時と何も変わっていなかった。もう夕暮れも終わるというのにリビングの窓は開け放したままになっていて、電気もついていない。そしてユウは、相変わらずソファで眠りかけていた。

（これじゃ泥棒に入られるよ）

明日はもう少し頻繁に様子を見に来なければならない。手間が増えたことを察したマイはため息をつき、小笠原家のキッチンへと移動した。カレーは煮込むのに時間がかかるためユウを起こすことはせず、マイは手元を照らす明かりだけで作業を開始する。

「……まだ？」

「うわっ！！」

てつきり寝ているとばかり思っていたユウが突然声をかけてきたので、驚いたマイは包丁を取り落としそうになった。慌てて握りなおし、マイは一息ついてから顔を上げる。

「おどかさないですよ。起きてるなら電気くらいつければいいじゃん」  
「カレー？」

「そう。文句ある？」

「好きだから。文句はない」

「じゃあ、あつちで座って待ってなよ。もう少しかかるから」

マイが邪険にリビングを指差すと、ユウは素直に頷いて戻って行った。しかしいつまで経っても電気がつかなかったので、不審に思ったマイは鍋をかき回しながらリビングを振り返る。

「ユウ？ 電気つけないの？」

返答はなかった。訝しく思ったマイは火を弱火にし、鍋を気にしながらもリビングへ行ってみる。するとユウは、大人しくソファに座っていた。しかしその首は垂れ、返事がないところを見ると眠っているようだ。

「よく、そんなに寝られるよね」

呆れた独白を零してみても、寝入っているユウからは反応が返ってこない。深々とため息を零したマイは鍋を火にかけていることもあり、ユウのことは捨て置いてさっさとキッチンへと戻って行った。

### 太陽のにおい(3)

夏は厚手の洗濯物もよく乾く。朝一番で庭に干した洗濯物は昼には乾いてしまい、マイは夕立を気にして早めにとりこみにかかった。まだ時間帯が早いので直射日光は厳しいが、洗濯物が早く乾くことは気持ちがいい。とりこんだばかりのタオルからは太陽の匂いがしていて、マイは爽快な気分ですタオルに埋めていた顔を上げた。

「あれ？ ユウ？」

ふと視線を移した先で珍しい姿を発見したため、マイは縁側で声を上げた。マイが発した声が聞こえたようで、ユウはすぐにこちらを向く。倉科家の垣根越しにユウと向き合ったマイは彼が手にしている小さな包みに目を留めた。

「本屋？」

「そう」

「なんか、ユウが昼間歩いてるところ見るの久しぶり」

「そうか？」

「そうだよ。全然焼けてないし」

マイが指摘するとユウは腕を持ち上げて、半袖から覗いている自分の肌を見下ろした。それから顔を上げ、確かに焼けてないと言っ  
て笑う。

（あ、ユウが笑った）

隣の席に座っていても、腕枕に顔を埋めていることの多いユウが表情の変化を見せるのは稀である。たぶん覚えていないだけなのだろうが、ユウの笑顔を初めて見たような気になったマイは思わず彼の顔を凝視してしまった。するとユウは途端に笑みを消し、ぶっきらぼんな口調で「なんだよ」と尋ねてくる。いつものユウに戻っただけだったが、マイは何故か慌ててしまった。

「そ、そうだ。上がってきなよ」

話を逸らすような形でマイが誘ってしまったため、ユウは首を傾

げている。そんなユウの反応に「しまった」と思ったマイはさらに慌ててしまった。

「麦茶でも出すから。暑いでしょ？」

「……じゃあ、おじゃまします」

マイは玄関に回ってユウを招き入れようとしたのだが、ユウは垣根の隙間から進入してきた。庭からだと玄関へ回るより早かったのだ、そのまま二人は縁側から家の中へ入る。二階の自室に戻るなりベランダに布団が垂れ下がっていることに気が付いたマイは、ユウに適当に腰を落着けるよう指示を出してから窓を開けた。夏の日差しをたっぷりと浴びた布団はカラカラに乾いていて、顔を寄せると太陽のにおいがする。今夜は気持ちよく眠れそうだと思いながら、マイは布団をベッドの上へと放った。

「ちよつと待つて。今持つてくるね」

ユウを部屋に残して階下へと急いだマイはよく冷えた麦茶に氷を放り込み、グラスを二つ持って自室へと戻った。

「お待たせ」

よほど喉が渴いていたのか、グラスを受け取るとユウは一気に麦茶を干した。渴きが癒えたことがよっぽど気持ちよかったのか、ユウはどこか気の抜けた微笑みを浮かべている。これは真正銘初めて見る表情で、マイはユウの表情の変化にばかんと口を開けてしまった。

（うわー、そんな表情もするんだ）

普段の彼が見せる表情といえば八割方が無表情、二割ほどの感情の変化も疲れや不快感を示すものだ。そのユウが、幸福そうに笑っている。

（あれ？ でも……）

ユウのギャップに驚いていたマイはふと、以前にも彼の幸せそうな表情を見たことがあるのを思い出した。あれは確か、春の教室。室内は春の日差しに暖められていて、開かれていた窓からは花の香りを乗せた春風が吹き込んできていた。誰もがアクビを噛み殺して

いた五時間目、ユウは腕枕に顔を埋めていて……。

（ああ、なんだ）

何ということはない。今のユウが見せている表情は、彼が眠りに就いている時と同じものなのだ。

「ユウ？」

ふと、ユウがとりこんだばかりの布団に熱い視線を注いでいることに気付き、マイは首を傾げた。マイが問いかけている間にベッドに上がりこんだユウは持ち主が見ている前で布団へと倒れこむ。目前で起こった出来事に目を疑ったマイは悲鳴に近い声を上げた。

「な、何してんの！？」

「太陽の匂いがする」

目をとろけさせながら独白のような返事を寄越したユウは、そのまま瞼を下ろしてしまった。すぐにベッドから規則正しい寝息が聞こえてきて、どうこうする暇もなかったマイは絶句する。しかしユウの気持ち良さそうな寝顔を見ているうちに、細かなことはどうでもよくなってきてしまった。

（そんな幸せそうな顔見せられたら起せないじゃない）

一番風呂に入り損なったような悔しさはあるものの、そんなことはユウの幸せに比べれば些細なことである。ユウの無防備な寝顔にはそう思わせてしまうほどの幸せが満ちていて、気の済むまで寝かせておくことにしたマイは静かに自室を後にした。

ユウがマイの部屋で眠ってしまったので、最後の夕食は倉科家で行うことになった。食事を終えてもユウが帰るとも言い出さなかった。夕食後は二人して縁側に移動する。まだ気温が下がりがき

ていないので夜風も生ぬるかったが、団扇があれば凌げない暑さではない。団扇を扇ぐ力で逆に体を熱くさせてしまわないよう調節しながら、マイは何となく口火を切った。

「ねえ、ユウ」

「何？」

「ユウってさ、寝るのが好きなの？」

「どうでもいいじゃん」

「どうでもよくないよ」

マイがきつぱりと言い放つとユウは訝しげに顔を傾けてきた。彼の顔が若干困惑しているように見えるのは、マイがいつもと違う反応をしたせいだろう。しかしマイはユウからの返事を待っていたので、言葉を重ねることはしなかった。ユウはしばらく考えているように沈黙していたが、やがて口を開く。

「何で？」

「聞きたいから」

「……だから、何で？」

「興味。ユウがどんなことを考えてるのか知りたいの」

「興味、ねえ……」

「ユウの寝顔、幸せそうだった。だから好きなのかなって思ったの」

「うん、幸せ」

「あ、やつぱり？ でもさ、暑くて苦しそうな顔して寝てる時もあるじゃない？ それでもやつぱり幸せなの？」

「……何でそんなに見てるんだよ」

思いがけずマイに観察されていたことを知って、ユウは呆れたようだった。ユウが言葉を途切れさせて夜空を仰いだので、マイも自家の縁側から見える狭い空を見上げる。

「洗濯物とりこんでるとき」

「え？ 洗濯物？」

ユウが唐突に喋り出したので真意が掴めず、マイはキョトンとして彼に目を向けた。ユウはぼんやりと空を眺めたまま話を続ける。

「マイ、幸せそうな顔してた」

「あー、うん。カラッと乾いて気持ちいいよね」

「夏の昼寝も、そんな感じ」

「……もうちょっと説明してほしいな」

「太陽がまぶしくて、緑がキラキラしていると幸せだろ？ 暑いけど、ときどき冷たい風が吹くと気持ちいいし、思いつきり汗かいてからシャワー浴びるのも、気持ちいい」

「あ、それなら分かる。気持ちいいと幸せだよな？」

マイが同意を示すとユウは口をつぐんで頷いた。下手くそな説明ではあったものの、ユウが初めて胸の内を明かしてくれたことを嬉しく思ったマイは口元をほころばせる。素直な気持ちは自然と言葉になり、マイの口から零れ落ちた。

「私、ユウのことけっこう好きかも」

「……は？」

唐突でストレートな好意の言葉を投げかけられたユウは驚いたように目を睨っている。そんなユウの反応が愛らしくておかしくて、マイは声を上げて笑った。

## 太陽のにおい（４）

夏の夜は寝苦しいので、マイは夏になると冷房をタイマーにかけて寝ていた。しかし夕食後にユウから話を聞いた夜、マイは今季初めて、冷房を消して眠りに就いてみた。日中の太陽を存分に浴びたフカフカの布団に転がり、翌日の晴天を思い浮かべながら眠りにつく。それはマイにとって初めての、とても幸せな体験だった。

（あゝ、これはハまるわ）

寝汗をびっしょりとかいたため、朝一番で冷たいシャワーを浴びたマイはよく冷えた麦茶を片手に縁側に座り込んでいた。午前中の風はまだ幾分涼しくて、自然乾燥させている髪を撫でるように乾かしていく。この髪が乾く頃には掃除やら洗濯やらで再び汗に濡れそうだが、その時はまたシャワーを浴びればいいのだ。そう思えば、じりじりと強さを増している夏の日差しすら心地好く思えた。

（ユウ、まだ寝てるかな？）

今日の午後には伊豆旅行に出掛けている両家の両親が揃って帰宅する。そうなれば次にユウの寝顔を拝めるのは長期休暇明けだ。その前にもう一度だけユウの寝顔を見ておこうと、マイはこっそり家を抜け出した。隣の隣へ行くだけなので着替えもせず、タオルも頭に巻いたまま小笠原家に進入する。二階の私室が空だったのでリビングを覗いてみると、しかしユウはすでに起き出していた。

「……どんなカッコ？」

よれよれのＴシャツにハーフパンツという、完全に部屋着スタイルのマイを見てユウは呆れ顔でツツコミを入れてきた。頭に巻いたタオルだけ回収しながら、マイは小さく舌打ちをする。

「起きてるし」

「何が？」

ユウが怪訝そうに問いかけてきたがマイは答えず、小笠原家のリビングでソファ―に腰を落ち着けた。マイがすぐ隣に座ったことで、

ユウは警戒するように少し身を引く。しかしマイはユウの後退を許さず、彼の腕を取るとニヤリと笑いながら顔を近づけた。

「ユウ、眠くない？」

「……眠くない」

「無理しないで、寝ていいよ」

「やめろよ」

「いいから。寝なさい」

ユウの腕を引いて強引にソファーに横たわらせたものの、本当に眠くないのか彼は目を閉じない。迷惑そうな目はしっかりとマイの姿を捉えたままで、ユウの顔を覗き込んでいるマイは首を傾げた。

「あれ？ ホントに眠くないの？」

「だから……」

起きたばかりなのだと、ユウは至極迷惑そうな口調で明かした。それでも諦めのつかなかったマイは、ユウの視界を強引に奪う。

「大丈夫、ユウなら起きたばっかでも寝れるよ」

「何がしたいんだよ」

「いいからいいから。目、閉じて」

冗談で子守唄を歌っていると、そのうちにユウから反応が返ってこなくなった。ユウの視界を奪っていた手を退けてみると、彼はいつの間にか瞼を下ろしている。しかも目を閉じているユウからは、微かに規則正しい寝息が聞こえてきていた。

（ホントに寝ちゃったよ）

まさか本当に眠ってしまうとは思っていなかったため、マイはユウの寝つきの良さに呆れてしまった。しかし本来の目的は達成することができたため、ソファーの下に移動したマイは存分にユウの寝顔を堪能する。

（かわいい）

ユウの幸せそうな寝顔を見ていたら自分も眠くなってしまい、マイはちょうどいい高さのソファーを土台にして腕枕に顔を埋めた。窓が全開になっている小笠原家のリビングは風通しがよく、吹き抜

ける夏の風が少し汗ばんだ体に心地好い。本気で寝入ってしまった  
マイとユウはその後、帰宅したユウの両親に見えられるまで目を覚  
ますことはなかった。

## クリスマスのあとに（１）

寒さが身に染みる十二月、マフラーに顔を埋めながら帰路を辿っていた倉科マイは進行方向に見知った者の後姿を発見した。茶色のダッフルコートをしっかりと着込み、さらにはマフラーで首元をぐるぐる巻きにしているのは小笠原ユウという少年だ。ユウはマイの家の隣の隣に住んでいる『ご近所さん』で、現在はクラスメートでもある。家まであと二分という距離ではあったが、マイはユウに駆け寄って声をかけた。

「ユウ」

マイが軽く背中を叩くとユウはよろけながら顔を傾けてきた。振り向いた彼の顔が眠そうに見えるのは、冬に限らず一年中のことだ。現在中学二年生のマイとユウは家が近所というだけでなく、同じクラスで隣の席に座っている。しかし少し前まで、彼らの関係は友達未満の『ご近所さん』だった。彼らの付き合いの距離は知り合ってから五年という歳月に見合わず、徒歩一分足らずという両家の間よりも開いていたのである。だが今年の夏に、マイはユウのことをちよつと好きになった。それ以来、マイはユウの姿を見つけるとりあえず構うようになっていた。

「痛い」

ユウは叩かれた背中に手を回しながらマイに文句を言った。おそらくは痛みを感じている部分をさすうとしていたのだろうがユウは体が硬く、また厚着をしているので背中に手を回す姿には無理が見える。不恰好なユウを笑い飛ばしたマイは、そのまま彼の文句もさらりと聞き流した。

「寒いねえ。何かあったかいもの食べたい」

マイが世間話をしながら歩き出すと、ユウも渋々といった風に従った。合流したのがすでにお互いの家が見えている地点だったが、二人は並んで歩く。

「そういえばユウ、クリスマスパーティー行く？」

十二月二十四日が終業式であり、マイ達のクラスはその翌日にクリスマスパーティーをやる予定になっていた。とは言ってもどこかの店を借りて盛大にやるのではなく、いつものように教室に集まって慎ましやかに騒ぐだけだ。マイは当日、調理担当として参加することが決まっていた。しかしユウは、にべもなく即答する。

「行かない。寝る」

ユウは睡眠を至福とする類の人間である。この答えも予想の範疇であり、マイは苦笑いを浮かべた。ここで話を終わらせても良かったのだが、まだ少し家まで距離があつたので、マイはクリスマスの話を続ける。

「調理部のみんなとケーキつくるんだよ。でっかいやつ」

自宅のオーブンでは無理だが、担任が家庭科教室の使用許可を取ってくれたため、マイは調理部に所属する数人のクラスメイトと大きなケーキを作ることになっていた。料理が好きなマイはそれだけでもウクウクしていて、ユウの反応など二の次に話をしていただが、それまで無反応だったユウがふと反応を示したので首を傾げる。

「もしかしてユウ、甘いもの好きなの？」

「好き」

「そうなんだ？　じゃあ、おいでよ。一緒にパーティー行こう？」

「余ったら持ってきて」

ケーキは食べたいが睡眠時間は削られたくない。言外にそう明言したユウは家に辿り着くと、さっさと姿を消してしまう。ユウが返事も待たずにいなくなってしまったため、マイも呆れながら自宅の門扉をくぐったのだった。

十二月二十五日、クリスマス。夕方から始まるパーティーの準備のため、マイは数人のクラスメートと共に昼過ぎから家庭科教室で奮闘していた。マイは調理部には所属していないが普段から炊事をしているため、料理はお手の物である。そのため、何かイベント事がある時にはこうして駆り出されるのだった。

「けつきよく、何人来るの？」

「先生入れて三十六だったかな？　ほぼ全員だね」

マイの問いに答えたのは小学生の時から友人である北沢朝香だった。調理部に所属している彼女は手際よく作業を進めながら話に応じてくる。マイもまた計量を続けながら考えを巡らせていた。マイ達のクラスは生徒総数が三十六名である。担任教師を入れてクラスの人気ということは、どうやら参加しないのはユウだけのようだ。

「小笠原君って謎だよな」

卵白を泡立てるカチャカチャという音に紛れ、朝香の零した呟きが聞こえてきた。どうやら彼女も、ただ一人クラスの行事に参加しない者のことを考えていたようだ。ユウの本質を何となく知っているマイは謎というほど大したもんでもないと思い、朝香の呟きに対して苦笑いを浮かべた。

「ケーキ食べたいって言うてたから、もしかしたら来る……かも」

ユウの弁解をしつつも、マイは半ば以上来ないだろうと確信していた。何故ならユウには協調性というものがなく、彼にとっては他人との交流よりも惰眠を貪ることの方が大切だからだ。

「甘いもの好きなんだ？　なんか、意外」

卵白を泡立て終えた朝香は手を止めてマイを見た。フルーツを刻む作業に取り掛かっていたマイはいったん手を止め、すでに卵黄を泡立ててあるボウルを朝香に渡す。阿吽の呼吸で進むマイと朝香の

ケーキ作りは非常に順調で、他の料理に取り掛かっているチームも着々と準備を整えているようだった。

生地が焼きに入ると、朝香は生クリームを取り出した。ボウルを渡されたので、マイは生クリームの泡立てを始める。バトンタッチしてフルーツを切る作業に移った朝香は包丁を動かしながら話を続けた。

「マイってさ、いつも小笠原君と何話すの？」

「んー、別に。ふつうに話してるだけだよ？」

「その普通ってというのが謎だね」

「そうかな？ あんまり自分から喋るタイプじゃないけど話しかけて無視されることはないし。ふつうだよ」

生クリームの方に神経を使っていたマイは半ば上の空で朝香との会話をしていた。そのうちに朝香も作業に集中したらしく、二人の間には沈黙が流れる。そうこうしているうちにも時間は着々と過ぎ去っていて、初めは和やかなムードに包まれていた家庭科教室も夕闇が迫る頃には戦場へと姿を変えていた。

## クリスマスのあとに(2)

特にハブニングもなくクリスマスパーティーを終えたマイは、家に帰るとすぐ料理疲れで眠ってしまった。すでに休みに入っているということもあり、昼過ぎに目を覚ましたマイがユウとの約束を思い出したのは十二月二十六日の夜になってからのことだった。

(ああ、忘れてた)

クリスマスパーティーでの食事は好評で、ケーキを含めて全てがなくなった。余りは出なかったのだがユウとの約束を果たしたかったので、一からケーキを作ることにしたマイは慌てて階下へ行き、冷蔵庫を開ける。しかし冷蔵庫にあったのは卵くらいで、生クリームやフルーツの類は何も置いていなかった。

「おかーさん」

すでに夕食も済んでいるような時間帯だったため、母親はリビングでテレビを見ていた。振り向いた母親の傍へ寄ったマイは急いで言葉を次ぐ。

「卵使っていい？ それと、お金ちょうだい」

「何に使うのよ？」

娘からの唐突な申し出に、母親はひどく胡散臭そうな表情になった。しかしマイが手短に事情を説明すると、彼女は急にしたり顔になる。

「いいわよ。じゃあ、卵も買ってきて」

母親から三千円を渡されたマイは気味が悪く思いながら首を捻った。

「何で笑ってるの？」

「いいから、気をつけて行ってくるのよ」

母親に軽くあしらわれたマイは疑問を残しながらもリビングを後にした。スーパーが閉まるまで三十分という時間だったので、マイはコートを着込んで慌しく家を出る。閉店間際に買い物を済ませた

マイはホツとして、少しのんびりとした歩調で冬の家路を辿った。

（寒いなあ。お風呂入りたい）

急ぎすぎたせいで行きにかいた汗はすでに冷えていて、吐き出す息は白く空に上っていく。こんな寒さでは、ユウはもう布団にくるまっているだろう。どうせ届けるのは明日なので、風呂で体を温めてからケーキ作りを開始しようと思ったマイは手袋を忘れたむき出しの手に息を吹きかけた。

（あれ？）

住宅街の角を曲がったところでふと、マイは同じ方向に向かっている人影に目を留めた。茶色のダッフルコートを着込んだ背中では、知っている人物のような気がする。歩調を速めたマイは追い抜きざまにさりげなくダッフルコート of 人物の顔を確認し、足を止めた。

「やっぱり。ユウじゃん」

「マイ？ こんな時間に何してんの？」

突然声をかけられたことで驚いた様子を見せたユウは足を止めると、まじまじとマイを見た。マイはスーパ－の袋を持ち上げて買い出しであることを示し、逆に問う。

「ユウこそ何してんの？」

マイに問われたユウは無言で小脇に抱えていた物を差し出した。本屋の包装を見たマイは納得して頷く。その後、二人はどちらからともなく歩き出した。

「何買ったの？」

ユウに問われたマイは決まりが悪くて、すぐには口を開けなかった。そんなマイの態度が不可解に映ったようで、ユウは首を傾げる。

「言いたくないならいいよ」

マイの沈黙をどう受け取ったのかは分らないが、ユウは配慮を示してくれた。しかしマイは、ユウに対して変に気を遣いたくなかつたし気を遣われたくもなかった。なので、マイは正直に買物の内容を白状する。

「ケーキの材料」

「ふうん？」

「ユウとの約束、すっかり忘れてたから」

買物の意図をそこまで明かすと、ユウは眉根を寄せて足を止めてしまった。つられて立ち止まったマイはユウの突然の行動を不可解に思いながら振り返る。

「何？ どうしたの？」

「それって、もしかして俺がケーキ持ってきてって言ったから？」

「うん。余らなかつたから作ろうかと思って」

もともと料理をするのは好きなのでマイ自身は手間とも思っていなかったのだが、それを聞いたユウは深々とため息をつく。本を小脇に抱えなおしたユウはその後、マイに向かって空いている方の手を差し出してきた。

「荷物」

「うん？」

「持つから。かして」

「え、何で？」

「悪いから」

マイが煮え切らないでいるとユウは強引にスーパーの袋を取り上げた。中に卵が入っているので、マイは焦ってユウにその旨を告げる。するとユウは少しばつが悪そうな表情を見せたが、すぐに真顔に戻って頷いた。スーパーの袋を手にした後、ユウは黙々と歩を進めている。その横顔が怒っているように感じられて、マイは恐る恐る口火を切った。

「余計なことだった？」

ひとたび口にしてしまうと、クリスマスを過ぎたケーキが急に押し付けがましいもののように思えてきた。ユウと顔を合わせるのが気まずく感じられたため、マイは問いかけておきながら目を伏せる。しかしユウから返ってきたのはいつもの、淡泊な短い返答だった。

「食べたいから。作って」

「あ、そ、そう？」

「うん。マイの料理は、美味い」

ユウがマイの料理の腕を知っているのは、夏休みにマイの両親とユウの両親が揃って旅行へ行ってしまったことがあったからだ。その時、マイがユウの分の食事も作ったのである。ストリートに料理の腕を褒められたマイは嬉しくなってしまう、気の抜けた笑みを浮かべた。マイのへらつとした表情を一瞥したユウは照れたようにそつばを向きながら言葉を重ねる。

「俺、一回ケーキのホール食いしてみたかったから」

嬉しいと、ユウは口の中で呟いた。もごもごとした小声ではあったものの、ユウの発言を言葉として聞き取ったマイは小さく吹き出す。

「うん。明日、持つて行くよ」

ユウに触れたい衝動に駆られたマイはダッフルコートの背中を叩いてから歩き出した。少し前のめりになったユウは顔をしかめていたが、そのうちにスーパーの袋を持ち直して歩き出す。十二月の凍てつく夜空には月が浮かんでいて、二人の帰り道を街灯よりも明るく照らしていた。

## バレンタインの奇跡？（１）

二月十三日は恋人たちの一大イベント、バレンタインデーの前日である。その日の授業が終わった放課後、倉科マイはいつもより賑わっている家庭科教室に顔を覗かせた。放課後の家庭科教室では調理部が部活動を行っているのだが、マイは部員ではない。しかしながらマイはお菓子を含めて料理が得意なので、イベントの前になると調理部から助っ人を頼まれることがしばしばあった。

家庭科教室内にはすでに、チョコレートの甘い匂いが漂っている。室内の人口密度がいつもより高いのは、これから調理部がチョコレートケーキの作り方を実演するため、その見学に女子生徒が集まっているからだ。マイは助っ人を頼んできた友人を探すために、人の輪の中に進入していく。三角巾にエプロン姿で調理台の前に立っていた北沢朝香がマイの姿を認めて声を上げた。

「あ、マイ」

「何手伝う？」

時間がないことを心得ていたマイは、朝香と合流するなり本題を口にする。朝香が部長の方をよろしくと言ったので、マイは調理部の部長である貴美子の姿を探した。中央の人だから離れた隅の方に目当ての姿を見つけたので、マイはそちらへと移動する。

「キミちゃん、来たよ」

「あ、マイちゃん。いつもごめんね」

マイの姿を認めると貴美子はすまなさそうに言った。マイは笑いながら首を振り、さっそく準備にとりかかる。助っ人扱いのマイは材料費を払わずに余ったチョコレートもらえるので、実はかなりお徳なのだ。

「気にしないで。お菓子作るのって楽しいし」

三角巾とエプロンを手早く身につけたマイが手を洗いながら言う。と貴美子はほんわかとした笑みを浮かべた。三年生はとつくの昔に

引退しているので、部長の貴美子もマイと同じく中学二年生だ。貴美子とマイは同じクラスになったことはなかったが、共通の友人である朝香を通して親しくなったのだった。

貴美子からどんなチョコレート菓子を作るのか簡単な説明を受けながら、マイはボウルや計量スプーンなどの器具を取り出した。家庭科教室の中央ではチョコレートケーキを、貴美子やマイがいる隅の方ではケーキ作りに失敗してしまった人のために簡単な菓子を作るのだそう。チョコレートケーキが難しいことを知っているマイは調理部で親切だなあと呟いた。

「キミちゃんは誰かにあげるの？」

お菓子作りに失敗しないコツはボウルをきれいにしておくことだと思っているマイは念入りにボウルの状態をチェックしながら貴美子に話しかけた。すでにチョコレートを刻み出している貴美子は手を止めないで話に応じる。

「うーん、どうしようかなって思ってるところ」

「えー？ キミちゃんって好きな人いたの！？」

「マイちゃん、声、大きいよ」

貴美子が困ったような表情を向けてきたので、マイは慌てて口を塞いだ。だが賑わっている家庭科教室の中ではマイの驚きも大したポリウムではなかったらしく、特に注目を集めたりはしていない。周囲を確かめたマイはホッとして、改めて貴美子に話しかけた。

「思ってるだけじゃダメだって。あげちゃいなよ」

「うーん……そうだよねえ。でも、あんまり話したこともないから渡しづらくって。それに、今年はバレンタインが休みでしょ？」

今年のバレンタインデーは土曜日なのである。恋人同士で渡す分には問題ないが、片思いの相手に渡そうとするときに『学校がない』というのは痛手だ。貴美子の言っていることがもつともだったので、マイは難しい表情をした。

「確かに、渡しづらいね」

「でしょう？ だから、たぶん渡せないかな。朝香は家まで行って

渡すって言ってたけど」

「えっ！？ ホントに!？」

マイが再び声を張り上げたので貴美子は慌てて口元に人差し指を立てた。貴美子の仕種を見たマイは口元を手で覆い、ケーキの実演をしている朝香を振り返る。しかし人だかりが見えるばかりだったので、マイは安堵して貴美子を顧みた。貴美子は複雑な表情をしたまま小声で話を再開させる。

「来年の今頃は受験があるでしょ？ だから今年が勝負なんだって」

「そっかあ、受験かあ……」

あまり考えたくない単語が飛び出したのでマイは曖昧に苦笑する。受験は誰にとっても重たい出来事なので、貴美子も早々と話題を変えた。

「マイちゃんは？ 誰かにあげないの？」

受験は他人事ではなかったが、マイにとってバレンタインデーは他人事である。だが不意に、甘党のクラスメートの顔が浮かんだので、マイはその人物の名前を口にしてみた。

「ユウにでもあげようかな」

「小笠原くん？ 甘いもの好きなんだ？」

貴美子が意外そうに言うのでマイは何の気なしに頷いた。小笠原ユウはマイの家の隣の隣に住む、いわゆる『ご近所さん』である。情眠を貪ることが趣味のユウは強制参加でもなければ行事などにもまったく参加しないので、周囲からは謎の人と見られていた。クラスメートでさえそういう認識なので、接点のない貴美子などには未知の存在もいいところだろう。

「マイちゃんって小笠原くんのこと好きだったの？」

貴美子が意外さを引きずったまま問いかけてきたのでマイは小さく首をひねった。

「そう見える？」

「見えないかも」

考える様子もなく即答した貴美子がまな板を渡してきたので、マ

イは笑いながら刻んだチョコレートを受け取った。

「ガナツシュ、作っちゃうね」

貴美子がテンパリングを始めたのでマイも話を打ち切って小鍋を火にかけた。生クリームと刻んだチョコレートが入った小鍋からはすぐに甘い香りが立ち上る。チョコレートの溶け具合を見ながら、マイはペーパーミントのリキュールに手を伸ばした。

バレンタインデーの前日に行われた調理部の実演会は盛況のうちに幕を下ろした。後片付けは手伝わなくていいと言われたので家庭科教室を後にしたマイは一人、薄暗い校舎を歩いている。しかしまったくの無人というわけではなく、他の部活動が終わる時間帯と重なったため、夕暮れの校舎内にはまだちらほらと生徒の姿が見られた。

渡り廊下から昇降口に向かっていたマイは、進行方向に知人の姿を見つけたので足を止めた。相手もマイに気が付き、目が合う。お互いに何となく歩み寄りながら、マイはジャージ姿の男子生徒に声をかけた。

「久しぶり」

マイが話しかけた人物は、一年生の時に同じクラスだった久本という少年である。昔のクラスメートというだけで友達と言うほど親しくはないが、顔を合わせれば話くらいはするという間柄だ。しかし二年生に進級してからは、話をするどころか久本を見かける機会さえ激減してしまった。その理由は同じ学年ではあっても、マイと久本のクラスでは教室がある校舎自体が違うからだ。

「部活？ 入ってたっけ？」

久本が怪訝そうな顔をしたので帰宅部のマイはこの時間まで学校に残っていた理由を簡単に説明した。話のついでに、マイは手にしていたチョコレートで久本に差し出す。

「食べる？ 余りものだけど」

「お、サンキユ」

部活動が終わったばかりの久本は空腹だったようで、マイが渡したチョコレートをさっそく口に放り込んだ。だがチョコレートという食べ物は水分のない状態で幾つも食べられるものではなく、久本はすぐに手を引く。『もういい』という合図を受け取ったマイは残りのチョコレートを鞆にしまった。

「チョコ、もうもらった？ サッカー部ってモテルでしょ？」

サッカー部や野球部、バスケットボール部などのメジャーな運動部に所属している男子は女子の間で人気が高い。しかしサッカー部に所属している久本は、マイの発言に呆れた顔をしてみせた。

「サッカー部全員がモテルなんて思ってたんの？ 単純だな」

「じゃあ、もらってないの？」

「いや、もらったけど」

「なんだ、やっぱりもらってるんじゃない」

「マネージャーから部員全員につて、義理チョコをな」

「……本命チョコは明日渡すもんなんだよ、たぶん」

久本ならもともともらっていると思っていたマイは気まずさから微妙なフオーをした。マイの顔にはあからさまに『しまった』と書いてあったので久本は声を上げて笑う。ひとしきり笑った後、久本は忘れ物を取りに行く途中だったことを明かした。

「チョコ、ありがとな。もらったからにはホワイトデーに何か返すよ」

「えっ、ホントに？ くれんの？」

「チョコレート一個分のお返しだけだな」

「うわあ、逆に期待できそう。楽しみにしてるね」

久本は意味深長にニヤリと笑い、軽い足取りで去って行く。一ヶ

月先に楽しみができたマイは弾んだ足取りで帰路を辿った。

## バレンタインの奇跡？（２）

二月十四日、土曜日。恋人たちの一イベント、バレンタインデーである。この日、マイの友人である朝香は長年片思いをしてきた相手にチョコレートを渡しに行つて玉砕した。そのため、マイのバレンタインデーは傷心の朝香を慰めることで終わった。

二月十五日、日曜日。バレンタインデーの前日に作ったチョコレートを持って、マイは自宅から一軒先の家を訪問した。来客の対応に姿を現したのはユウの母親であり、彼女は玄関先に佇むマイの姿を見つけると柔らかな笑みを浮かべる。マイは軽く頭を下げ、あいさつをした。

「ユウ、起きてます？」

マイが問うとユウの母親は首を傾げるついでに二階を仰いだ。

「どうかしら。約束でもしてた？」

「約束はしてないです。じゃあこれ、ユウに渡してもらえますか？」  
ラッピングされた小袋を受け取ったユウの母親が不思議そうにしていたので、マイは簡単に事情を説明した。ユウの母親は納得したように頷くと受け取ったばかりの小袋をマイに差し出す。

「マイちゃんから渡してあげて。さあ、どうぞ」

ユウの母親が満面の笑みで家の中へと誘うので、マイはチョコレートの小袋を抱えて従った。ユウの母親はそのまま一階に残り、マイだけが二階へ続く階段を上る。ユウの部屋をノックしても反応がなかったので、マイは少しだけ扉を開いて声をかけた。

「ユウ？」

声をかけても、やはり反応はない。マイが室内に進入すると案の定、ベッドには丸い膨らみがあった。すでに昼を過ぎていたのでマイは呆れながらベッドに寄る。

「ユウ、起きなよ」

マイが揺さぶると丸い物体は呻き声を発した。寝顔すら覗いてい

なかった。マイは少し掛け布団をずらす。すると、ユウの寝乱れた髪が出現した。しかし外気に触れた顔が寒かったようで、ユウは再び布団を引き上げる。意識があるのかないのかは分からなかったが、ユウが起きることを拒んでいた。マイはため息をついて手を引いた。

（無理に起こさなくても、置いてればいいか）

早々に諦めたマイは机の上にチョコレートを置いて帰ろうとした。だが机の上にはすでに可愛らしくラッピングされた小袋があり、それを目にしたマイは首を傾げる。マイが机の上に視線を注いでいると軽いノックの音と共にユウの母親が姿を現した。

「起きない？」

お盆に乗せたカップを机の上に置いたユウの母親は振り返りながらマイに尋ねる。マイが苦笑を返すとユウの母親はベッドに向かった。無言のまま、ユウの母親は掛け布団に手を伸ばす。そして一気に、掛け布団を引き剥がしたのだった。

ユウの母親は物腰が柔らかく、普段は淑やかな印象である。それが息子とはいえ手荒な扱いをすることに、マイは驚きを隠せなかった。掛け布団に張り付いていたユウは床に転がり、呻き声を発しながら体を起こす。ユウの母親は息子の様子には目もくれず、空のお盆を手にしてマイを振り返った。

「ゆっくりしていつてね」

ただ頷くだけのマイに柔らかな笑みを向け、ユウの母親は去って行く。室内にはしばらく沈黙が流れていたが、やがてユウが寝起き丸出しの声を発した。

「何でいるんだ？」

ユウは床に座り込んだ格好で掛け布団にくるまっており、眠そうな目でマイを見上げている。ユウの家を訪れた理由を思い出したマイは机の上に置いた小袋を手にとってユウの傍にしゃがみこんだ。

「あげる」

マイが小袋を差し出すとユウは床に寝転がりながら「置い」として「

と言う。色々な意味で呆れたマイは掛け布団の端を引っ張った。

「ユウ、そんな所で寝てると風邪ひくよ」

「んー」

「ユウ、起きなつてば」

「……ん」

「……寝ぼけてんの？」

「うつ……」

「起きろ！」

マイが布団を引き剥がすとユウはようやく体を起こした。ユウの母親が手荒になる理由を得心したマイは深々と頷く。パジャマ姿のユウはベッドに背を預け、二、三度頭を振ってからマイを見上げた。

「……何でいるんだ？」

「……その科白、二度目だよ？」

夏はこんなに酷くなかったのにと、マイは嘆きながら同じ説明をくり返す。今度こそ状況を理解した様子で、ユウは床に転がっている小袋を手にした。

「寝起きに甘いもの食べると頭がはつきりするらしいよ。今、食べたら？」

冷ややかに言い置き、マイは机の上に目を移した。そこにはユウの母親が運んできたカップが二つあり、一つをユウに渡したマイはもう一方のカップに口をつける。カップの中身はホットコーヒータたが、すでに温くなっていた。

「それ、俺のカップ……」

ユウが小声で抗議したのでマイはギョツとしてカップから顔を遠ざける。サッカーボールが描かれている白いカップから視線を移し、マイは決まりが悪く思いながら口唇を尖らせた。

「口つけてから言わないでよ。ユウが寝ぼけてんのが悪いんじゃない」  
「……まあ、いいけど」

抗議はしたもののそれほど気にしていなく、ユウは袋を開けてチョコレートを口に放った。糖分をとったことで少しは頭が冴

えてきたのか、今度はユウが自ら話し出す。

「何でチョコレート？」

キョトンとしているユウは本当に分かっていないようで、マイは呆れを通り越して言葉を失った。眩暈がしたマイは頭を抱えながらユウの正面に腰を落ち着ける。

「あのね、ユウ。今日は何月何日？」

「……忘れた」

「二月十五日！ あ、あれ？」

ユウに言い聞かせようとしていたマイは自分が思惑と違うことを口走ったことに気付き、動転した。ユウはマイペースにチョコレートを口に運び、それから不思議そうにマイを見る。

「何の日？」

「……バレンタインデーの次の日」

「ああ、バレンタインのチョコか」

ユウは納得したように頷いたがマイには後味の悪さが残った。マイが黙っているとユウはコーヒーを一口含み、口の中を空にしてから言葉を紡ぐ。

「これ、作ったの？」

「あ、うん。調理部の手伝いして、余り物もらってきたけなんだけどね」

「ふうん」

「あ、そういえば。あの机の上にある袋って、もしかしてチョコレート？」

ふと思いついたマイが机の上を指すと、ユウはあっさりと頷いて見せた。興味を引かれたマイは可愛らしくラッピングされたチョコレートについて質問を続ける。

「誰にもらったの？」

「松丸さん……だったと思う」

「松丸さん？ え、あの、松丸さん！？」

マイの知る限り、松丸という苗字の女子は同学年に一人しかいな

い。そしてその松丸という女の子は、非常に可愛いのである。

「ど、どんな子だった？ 髪の毛が茶色っぽい？」

マイが急いて問うとユウは思い出すようにしながら頷いた。ユウの言っている『松丸さん』が間違いなく学校でも一、二を争う美少女だと確信したマイは思わず感嘆の息を吐く。

「……奇跡」

年中寝てばかりのユウが、誰が見ても可愛いと思える女の子からバレンタインデーにチョコレートもらう。これが奇跡以外の何なのかと、マイは感慨深く思ったのである。だが当の本人は怪訝そうな表情をしていた。

「奇跡？」

「そつかあ、ユウの良さを分かってくれる人っているんだねえ。松丸さん、可愛いから。ユウ、きつと男子に羨ましがられるよ」

「は？」

「えっ？」

ユウが女の子から告白されたということに感動すら覚えていたマイは、そこで会話がまったく成立していないことを察して眉根を寄せた。頭を爆発させているユウもまた、眉間に皺を刻んだままマイを見据えている。

「男子に羨ましがられるって、何で？」

「えっ、だって、松丸さんにチョコレートもらったんでしょ？」

「もらったけど、それが何で羨ましがられるんだ？」

ユウが不可解だという態度を崩さないでマイはチョコレートをもらった時の状況を詳しく聞いてみた。ユウの話によれば十四日の夜にたまたま家の近くで松丸に会い、知り合いだったので少し雑談をした上でチョコレートをもらっただけとのことであった。直接的な告白をされていないのでユウは理解していないようだが、バレンタインデーにたまたま家の近くで会って、たまたまチョコレートをもらうなどという状況があるはずない。

（……鈍い。鈍すぎるよ、ユウ）

松丸の想いはマイの口から説明していいものではなかったの  
で、マイに出来ることはただ頭を振ることだけだった。

### バレンタインの奇跡？（3）

二月十六日、バレンタインデーも終わって落ち着きを取り戻した月曜日。その日の昼休み、マイは貴美子に呼び出されて人目につきにくい校舎の影にいた。朝香の話だろうと思っていたマイは、貴美子はその話題を切り出したので小さく息を吐く。

「ダメだったって。違う学校に彼女がいたらしいよ」

「そうだったんだ……。朝香、今日は部活も来ないかな？」

「うーん、今はそつとしておいてあげようよ。キミちゃんは？ 渡したの？」

マイが問うと貴美子は小さく首を振った。マイは返す言葉に困り、そっかあとだけ呟く。貴美子は弱ったような笑みを浮かべながら話題を変えた。

「あのね、マイちゃんにちょっと聞きたいことがあるの」

「うん？ 何？」

「小笠原くんの様子、いつもと変わらない？」

貴美子とユウはお互いに顔くらいは知っているというだけの関係であり、おそらく話をしたこともないだろう。そんな彼女が自分からユウの話題を持ち出したのは、これが初めてである。その理由にピンときたマイは答える代わりに問いを口にした。

「もしかして、キミちゃんって松丸さんと仲いい？」

「あ、知ってるんだ？ 私が直接仲いいわけじゃないんだけど、松丸さんと仲がいいクラスの子に頼まれちゃって」

貴美子はすまなさそうにしながら事情を打ち明けた。マイは何だか複雑だなと思ひながら苦笑する。

「松丸さんがユウにあげたチョコ、やっぱり本命だったんだ？」

「うん、そうみたい。でも小笠原くんがちゃんと分かってくれたのになって、松丸さんが心配してるんだって。マイちゃん、どう思う？」

「松丸さんには言いづらいと思うけど……まったく伝わってなかったよ」

マイがユウの様子を伝えると貴美子はため息をついた。ユウの態度は思い出しながら説明しているだけでも呆れるものだったので、マイもつられて息を吐く。

「松丸さん、ユウのどこが良かったんだろう」

「小笠原くんの寝顔が可愛いつて言ったらしいよ」

「寝顔、かあ……」

ユウは一年中、授業中でもお構いなしに眠っている。そのため学校にいてもユウの寝顔を見ることが出来る機会はいくらでもあり、ましてユウと松丸は一年生の時に同じクラスだったのだ。松丸はおそらく隣の席になった時にでも見たのだろうと、現在ユウの隣に座っているマイは漠然とそんな予想を立ててみた。

ユウの寝顔は子供のようで、確かに可愛いのである。そのことを知っているのが自分だけではなかったと知ったマイは少し寂しさを感じていた。

（見てる人はちゃんと見てるもんだなあ）

それでも、ユウの寝顔に目を留めた人物が美少女だったというあたり、やはりバレンタインの奇跡だったのではないかとマイは思った。ユウの態度は素っ気なかったが、それは松丸の真意が伝わっていないためである。彼女からちゃんとした告白をすれば、どう転ぶかはまだ未知数なのだ。

「松丸さんがユウと付き合いたいと思ってるんだたらスパツと告白しないとダメだよ。遠まわしに言っても絶対伝わらないから」

松丸とは直接の友人ではないため深入りをする気はなかったが、マイは一般的なアドバイスとして貴美子にそう助言した。マイの言葉を聞いた貴美子は少しだけ眉根を寄せる。

「バレンタインに家までチョコあげに行つて、それでも伝わってないつてすごいね。小笠原くんつて、やっぱり謎かも」

「……私もよく分からないや」

マイは夏に、少しでもユウの内面に踏み込むことに成功した。その時はユウのことがよく分かったような気がしていたのだが、マイは今、再びユウのことが分からなくなってしまうていた。

（ユウのこと分かったような気がしたなんて夢だったのかも）

ちよっとだけユウのことを好きになる前の状態に戻ってしまった

マイは朝香や貴美子と同じく、ユウは謎だと眩きを零した。

## ホワイトデーの動機（１）

日に日に春の気配が迫ってきている三月のとある日曜日、倉科マイは母親に呼ばれて二階にある自室を後にした。昼の時分、マイは昼食だろうと思つて階段を下りて行つたのだが、玄関先には来訪者の姿があつた。

「あれ？ ユウじゃん」

靴を履いたまま玄関先に佇んでいたのはマイの家の隣の隣に住んでいる小笠原ユウという少年だった。ユウとマイは小学校三年生以来の付き合いで、現在はクラスメートでもある。

ユウは何よりも惰眠を貪ることを好むため、休日に姿を見かけることは滅多にない。希少な出来事に驚いたマイは止まっていた足を再び動かし、階段を下りきつた。玄関に辿り着いたマイと入れ替わるように、来客の対応に出て来ていた母親がニヤニヤ顔でリビングへと戻って行く。母親の訝しい態度に首を傾げた後、マイは改めてユウを振り返つた。

「どうしたの？ ユウがうちに来るなんて珍しいね」

もしかすると珍しいどころの騒ぎではなく、ユウが自発的に訪ねて来たのはこれが初めてかもしれない。あまりにも珍しい出来事だったので、真顔に戻つたマイはどんな事情があるのかと身構える。ユウの口から出てきた言葉は、別の意味でマイの想像を絶するものだった。

「お菓子の作り方、教えてほしいんだけど」

「……は？」

意外すぎる申し出に、マイは啞然とした。

ものぐさなユウは普段から家事を一切しない。料理なんてもつての外であり、ユウの両親が留守にした時にはマイが食事を作りに行ったほどである。そんな人物が料理（しかも菓子類）を作りたいと言ひ出すなど、マイには想像もつかない珍事だったのだ。

「ダメ？」

マイが明確な返事をしなかったので、ユウが言葉を重ねてきた。なんとか驚きを治めたマイはユウが甘党であることを思い出し、何となく納得して頷く。

「いいよ。それで、何作りたいの？」

「クッキー」

「クッキーね。うん、いいんじゃない？」

物にもよるがクッキーは材料の種類が少なく、生クリームなどを使わないので比較的簡単に作ることが出来る。お菓子作りの入門には最適だと思ったマイは細かなことは言わず、とりあえずユウに上がるよう指示を出した。階段を上り、二階にある自室へユウを招き入れた後、マイは本棚からお菓子類の本を数冊引き抜いてクッキーのページを開ける。

「型抜きとかアイスボックスとか色々あるけど、どれがいい？」

「……違いが分からない」

ユウは眉根を寄せ、床に広げられている本を見比べている。マイはユウのために簡単な解説を加えた。

「アメリカンのプレーンはラング・ド・シャみたいな食感になるよ。型抜きは見た目がキレイだね。アイスボックスは市松模様とか、色んな模様が作れるの。絞り出しは一番手間がかからないかな」

「ラングドシャ？」

「ああ、えっと、軽くて口の中で溶けるみたいな感じのやつ」

「ふうん。色々あるんだな」

ユウは感心したように相槌を打った後、再び本に見入った。しかし本を眺めているだけでは結論が出なかったようで、ユウは再びマイを仰ぐ。

「マイはどれが好き？」

「うーん、そうだなあ。食べる分にはアイスボックスが好きかな」

「じゃあ、それで」

ユウがあっさりと同調したので、マイはそれでいいのかと呆れた。

マイの視線には気が付かなかったようで、ユウは熱心に材料覧を眺めている。

「バターと砂糖と卵……二千円で足りるよな？」

「買い置きがあるかもしれないから、買い物は確認してからの方がいいよ」

算段しているユウに言い置き、マイは台所へ行くべく立ち上がった。するとユウが慌てた様子で制止の声を発したので、部屋を出ようとしていたマイは扉を背にして振り返る。

「何？」

「材料費は俺が出すから」

「へ？ 何で？」

「俺が頼んでるから」

「何言ってるの。無塩バターとかなんてお菓子作りでもしなきゃ使わないんだから。使い切らないともったいないでしょ？」

「……まあ、確かに」

「足りない物だけ買えばいいんだよ。確認してくるからユウはここで待ってて」

主婦思考のマイに押し切られる形で、ユウは渋々頷いた。ユウを部屋に残して廊下へ出たマイは、今度こそ階下の台所へと向かう。リビングには母親がいて、マイが台所を漁り始めると不審そうに声をかけてきた。

「何してるのよ、うるさいわね」

母親が台所まで出向いてきたので、マイは戸棚を探りながら事情を説明した。ユウにお菓子作りを教えるのだと聞くとマイの母親は急に文句を収める。

「じゃあ、お母さんは買い物に行ってくるから。五時までには台所空けてね」

ひどく好意的な母親の言葉を聞いたマイは眉根を寄せて顔を上げ、常々疑問に思っていたことを尋ねてみた。

「お母さん、ユウに甘くない？」

「だってユウちゃん、素直でカワイイじゃない。同じ男の子でも秋雄とは大違い」

ユウと比較されている秋雄はマイの兄である。大学生で一人暮らしをしている兄のことはさておき、マイは母親の言い分に呆れかえった。

「はいはい。卵、使ってもいいですか？」

「いいわよ。買ってくるから」

母親から了承を得たマイは確認作業を終え、部屋に戻ることにした。リビングの扉を後ろ手に閉め、マイはため息を吐く。

（ユウっておばさんにもモテるんだ）

やっぱりユウのことはよく分らないと呟きながらマイは二階の自室に戻った。床に座ってお菓子の本を眺めていたユウが顔を上げたので、マイは確認の結果を伝える。

「三十個くらいだったらうちにあるので足りそうだよ。もつと数、いる？」

「いや、そのくらいでいい」

まだ材料費のことを気にしているのか、ユウは渋い表情のままだった。また細かいことを言い出されないうちに、マイはユウを促して部屋を出る。リビングへ行くとすでに母親の姿はなく、台所に立ったマイはさっそく器材を取り出した。

冷蔵庫から取り出したばかりのバターは硬かったので、マイはユウに手の熱で柔らかくするよう指示を出した。ボウルの中のバターをユウが揉んでいる間に、マイは薄力粉や砂糖の準備をする。お互いの作業をしながら、マイとユウは雑談を始めた。

「ユウさあ、最近寝すぎじゃない？」

「……そうか？」

「そうだよ。この間のバレンタインの時だってさ、寝起き悪すぎ。」

夏はそんなでもなかったのに、何で？」

「冬は……無理。布団から出たくない」

「……まあ、その気持ちは分かるけど。あんまり寝てばっかいると

「脳みそ溶けるよ？」

「溶けないって」

ユウは苦笑しながらバターが柔らかくなった旨をマイに伝えた。

マイはボウルの中を覗き込み、ユウに次の指示を出す。

「手、洗って。泡だて器で混ぜて」

ユウにそう告げた後、マイ自身は冷蔵庫から取り出してきた卵を割った。卵の殻を使って卵白と卵黄とに分けていると、ユウが感心したような視線を向けてくる。

「器用だな」

「いいから、早くバターを混ぜる。そこに塩出しておいたから一つまみ加えてね」

「……はい」

マイに素っ気なく返されたユウは大人しく作業に戻り、バターをかき混ぜ始めた。バターがクリーム状になったところでパウダーシユガーを加え、再び混ぜるという作業を幾度か繰り返し、卵黄と薄力粉を加えて混ぜ合わせれば生地の完成である。

「生地を袋に移して、こーやって丸めて、冷蔵庫で少し硬くしたら後は焼くだけ」

生地を冷蔵庫に納めたマイはユウを振り返り、初めてのお菓子作りの感想を求めた。ユウは半笑いを浮かべ、小さく首を振る。

「手間がかかる」

「それが楽しいんじゃない」

マイがきつぱりと言い切ると、ユウは尊敬すると呟いた。

「そういえば、何で急にお菓子作りする気になったの？」

マイが何気なく問いを口にするユウは表情を改めた。どんな動機が語られるのかと、マイも真顔に戻って身構える。しかしユウが発した言葉は質問の答えではなかった。

「やつぱり俺、金払う」

「……いいって言ってるのに」

ユウが材料費の問題を蒸し返したのでマイは呆れていたが、やが

て妙案を思いついたのでポンと手を打った。

「それならユウ、ヨーグルト買ってきて。プレーンのやつね」

「ヨーグルト？」

「うん、ヨーグルト。クッキー代はそれでチャラ」

「……分かった。行ってくる」

ユウが素直に踵を返したので、マイも玄関先まで見送りに出る。

戻って来たらインターホンで知らせることをユウと確認しあった後、マイは台所に戻って卵白の泡立てを開始した。

## ホワイトデーの動機(2)

往復で二十分ほどかかる近所のスーパーへ買い出しに行ったユウは、マイの言った通りプレーンのヨーグルト一つだけを手に戻って来た。冷蔵庫のクッキー生地もほどよい頃合だったので、マイはさつそくユウに焼き方を伝授する。クッキーをオーブンにかけた後、マイはユウが買ってきたヨーグルトを開封した。

「そのまま食べるのか？」

ユウが不思議そうに尋ねてきたので、マイは卵白の入ったボウルを指し示す。

「クッキーには卵黄しかいらなから。卵白、捨てるのもったないでしょ？」

ユウはマイの言葉に頷きながらボウルを覗き込んだ。泡立てた卵白に砂糖とヨーグルトを加えて混ぜ合わせれば、作業は終了である。マイがボウルごと冷凍庫にしまうとユウが首をひねりながら疑問を口にした。

「それで、何が出来るんだ？」

「アイス……って言うよりシャーベットかな。食べたい？」

「食べたい」

「じゃ、明日食べにおいでよ。私が持っていってもいいけど」

「明日？」

「凍るの、六時間くらいかかるから」

「……明日、食べに来る」

ユウが渋い表情で納得したのでマイは笑いながら頷いた。クッキーが焼きあがるまで再び時間が空いてしまったので、マイはユウを促してリビングへと移動する。

「そういえばユウ、ご飯食べた？ 私、お昼まだなんだけど」

「微妙な時間に食べた」

「小腹、空いてる？」

「微妙。何か作ってくれるなら食べたいかも」

「はいはい」

ユウの微妙な返答にマイは肩を竦め、一人で台所へと戻った。夕食までそれほど間のない時間帯だったので、小さなおむすびを作る。熱い緑茶と一緒にリビングへ運び、マイはユウの隣に腰を下ろしておむすびにかじりついた。

「そういえばユウ、松丸さんから何か言われた？」

マイが話題にのぼらせた松丸とは、ユウのことを好きな女の子のことである。松丸はバレンタインデーにチョコレートを渡したのだが、ユウには彼女の真意がまったく伝わっていなかった。人伝にそのことを聞いたマイは『ユウに気持ちを伝えるにはストリートに告白するしかない』という助言を間接的にしたのだ。マイはその結果が知りたかったのだが、ユウは話を通じていない様子で首を傾げる。

「何かって何？」

「……いや、何も言われてないならいいんじゃない？」

「何だよ、それ」

ユウは不可解そうな表情をしていたが、それ以上の追及はしてこなかった。普通は気になって問い詰める場面だろうに、ユウにとっではどうでもいいことなのかもしれない。そう考えると松丸が不憫に思えて、マイは小さく肩を竦めてから緑茶を飲み干した。その後、片付けをしようと空いた皿に手を伸ばすと、ユウが行動を制してくる。

「俺が持つてくから」

「そう？　じゃ、持つてきて」

ユウにリビングの片付けを任せ、マイは台所に移動した。先程焼きあがりを告げる音が鳴ったため、オーブンは沈黙している。扉を開けると加熱されたバターの香りが台所に漂った。

「うん。いい感じ」

クッキーがいい色合いに仕上がっていることを確認したマイは新しい皿を取り出して、そこにクッキングペーパーを敷いた。その上

にオーブンから取り出したクッキーを並べていると、リビングからやって来たユウが不思議そうに覗き込んでくる。

「これは何してんの？」

「余分な油を取ってんの」

「へえ」

「ユウ、食べてみなよ。焼きたてだから美味しいよ」

マイが何気なくクッキーを差し出すと、両手に湯呑みと皿を持っているユウは困った顔をした。マイはニヤリと笑い、ユウの口元にクッキーを近づける。

「はい、あーん？」

「やめろよ。これ置いてから食べればいいだけだろ」

少し不機嫌な顔になって、ユウは流しに食器を置いてからクッキーが盛られた皿に手を伸ばした。行き場がなくなってしまうため、マイは手にしているクッキーを自分の口に放る。

「うん、上出来。美味しいよ、ユウ」

「まあ、こんなもんだろ」

口では普通だと言いつつも、ユウはまんざらでもない様子だった。ちぐはぐなユウの態度に笑いながら、マイは引き出しを開ける。

「持って帰るんでしょ？ ラップでいい？」

「五個だけ包んで」

「え？ それだけ？」

「うん。残りは、マイに」

「……どういうこと？」

「今日は何月何日？」

唐突に日付を尋ねられたマイは、とっさに壁掛けのカレンダーを振り返った。そして、目にした日付を無感動に読み上げる。

「三月十四日の日曜日……うん？」

「何の日？」

「……ホワイトデー」

ようやく納得がいったマイは途端に忙しない気持ちになった。し

かしマイがソワソワしながら顔を傾けても、ユウは真顔のままである。

「チヨコ、もらったから。お返し」

ユウがまったく表情を変えることなく言っただけだったので、笑いが堪えられなくなったマイは吹き出した。

「うわー、マメだよ！ ユウってリチギだったんだ」

「……マイの方がよっぽど律儀じゃん」

「ええ？ 何で？」

「クリスマスにもケーキもらったし」

顔を背けたユウはモゴモゴと、文句まがいの礼を言った。マイはユウの態度に爆笑したが、ふと腑に落ちたことがあったので真顔に戻る。

「それで材料費のことにこだわってたの？」

「お返しする相手におごられるって、意味わかんないじゃん」

「……確かに」

ユウの意見に深く頷きながらも、マイはじわじわと嬉しさが沁みてくるのを感じていた。胸の中が微笑ましい気持ちで一杯になったので、意味もなくユウの背中を叩いてみる。

「やっぱりユウのことかなり好きかも」

「……は？」

「せっかくだから一緒に食べよ？ 紅茶淹れてくから先行ってて」

ユウは怪訝そうに眉根を寄せていたがマイは特に補足することはせず、クッキーの皿を持たせるとユウを台所から追い出した。マイ自身は紅茶を淹れてから、サララップを持ってリビングへと戻る。ユウに言われた通り五個だけ取り分けて、それからマイは改めてクッキーの乗った皿に手を伸ばした。

「それにしても、ユウがホワイトデーを覚えてたなんてねー。ビツクリだよ」

マイがホワイトデーの話題を蒸し返すとユウは嫌そうな顔をしてそっぽを向いた。無性にユウをからかいたい気分のマイは、拗ねて

いるユウの頬を指でつつく。

「やめろって」

マイの手を邪険に振り払うと、ユウはソファーの上で移動してマイから距離をとった。もう少しユウで遊ぼうと思っていたマイはふと、あることに気がついてテーブルに視線を向ける。

「ユウ、この五個って松丸さんへのお返し？」

ユウは不機嫌そうにしていたが、マイが真顔に戻ったので態度を改めた。ユウが頷いて見せたので、マイは嫌な予感を覚えながら問いを重ねる。

「もしかしてさ、このまま渡そうとか思っていない……よね？」

「……ダメなのか？」

ユウの返答が案の定なものだったので、マイは額に手を当てて首を反らせた。

「あのねえ……お返しなんですよ？ だったらちゃんとラッピングして渡すこと！」

中身が手作りとはいえ、サランラップのまま渡されたのでは相手も困るだろう。女心が分かっていないという以前に、ユウには一般的な常識が欠けている。今更ながらにそう思ったマイはため息を吐いてから立ち上がった。

「何かないか探してくるから。ちょっと待ってて」

ユウにそう言い残し、マイはリビングを出て二階の自室に向かった。部屋を探っていると思いかけのラッピング用品を発見したので、マイはホッとして息を吐く。

（まったく……ラップのまま渡そうとするなんて何考えてんだか）

もう一度深々と息を吐き、マイはラッピング用品を手に部屋を出た。しかし階段の手前で立ち止まり、マイはしげしげと手にした物を見つめる。

律儀にもバレンタインのお返しをしようと思ったユウは、松丸にまったく気がない訳ではないのかもしれない。松丸の方は本気のようなので、ユウにその気があるのならばカップル誕生である。ホワ

イトデーのお返しをきっかけにユウが松丸と付き合い出すのかもしれないと思うと、マイは少し複雑な気分になったのだった。

### ホワイトデーの動機(3)

三月十五日、ホワイトデー翌日の月曜日。マイはこの日、隣の席に座っているユウがいつクッキーを渡しに行くのか気になって仕方なかった。だが何事もなく昼休みが過ぎ、ついに放課後になってもユウは松丸の元へ行く気配がない。初めはソワソワしていたマイも帰りのホームルームが終わった頃には呆れていて、隣の席で眠りこけているユウの肩を揺さぶった。

「ユウ、起きなよ」

マイが揺り起こすとユウは鬱陶しいと言わんばかりに寝ぼけ眼を上げた。もう放課後だとマイが教えてやるとユウはようやく体を起こし、あくびをしながら鞆に手をかける。本当に脳みそが溶けてしまったのではないかと疑ったマイは、立ち上がろうとしたユウに声をかけて制した。

「ユウ、昨日のこと覚えてる？」

「昨日のこと？」

再び腰を落着けたユウが怪訝そうに問い返してきたので、マイはますます疑いを強めた。ユウの脳みそは本当に溶け出しているのかもしれない。

「松丸さんにお返しあげに行くんでしょ？　ちゃんと覚えてる？」

松丸という女子は他のクラスでも人気が高いので、マイは声をひそめて言った。しかし可愛い女子に想いを寄せられているという自覚のないユウは平素と変わらない声音で応える。

「覚えてるけど、それが何？」

「いや、覚えてるならいいんだけど……。あんまりにも渡しに行く気配がないから忘れてるんじゃないかと思って」

「……何でそんなに見てるんだよ」

ユウは呆れたような表情をしてマイから視線を外した。そこへ友人の朝香がやって来たので、マイも彼女の方へ視線を傾ける。

「マイ、久本くんが呼んでるよ」

朝香が教室の扉を指したのでマイはそちらに顔を向けた。久本は一年の時にマイと同じクラスだった男子である。扉の所でヒラヒラと手を振っているジャージ姿の久本を目にした刹那、マイはあることを思い出した。

「ああっ！」

思わず声を上げたマイは朝香に礼を言い、急いで席を立つ。しかし歩き出そうとすると、何かの力によってその場に引き止められたスカートの裾を引っ張っている手の主を見下ろし、マイは首を傾げる。

「何？」

「……なんだろ？」

奇妙な返答を寄越したユウは煮え切らない表情で手を離れた。マイにもよく分からなかったが久本を待たせているので、追及はせずにその場を後にする。

「こっち来て」

小箱を手に行っている久本はマイに手招きをしながら移動を開始した。二人がやって来たのは階段の裏であり、ここは知る人ぞ知る密談に最適な場所である。すでに用件を察しているマイは期待のこもった瞳で久本を見た。

「まさか本当にくれるとは思わなかった。で、何くれんの？」

マイがせっつくと久本もニヤリと笑って小箱を開ける。小箱の中には透明なビンが入っており、ビンの中にはレモン色の飴がたくさん入っていた。ちなみにこれは『チョコレート一個分のお返し』である。

「一つ取って、今すぐ食って」

久本の挑戦的な科白にピンときたマイは、受けて立つと言い放ちながら飴を一つ取り出した。おそらくこれはロシアンルーレット式のゲームなのだろう。

「一個だけすごくすっぱいとか、そういうやつでしょ？」

透明な包み紙を開き、マイは笑いながらレモン色の飴を口に放る。当たるはずがないと高を括っていたマイは、飴が舌に触れた瞬間に吐き出した。

「辛い！！」

あまりの辛さに耐えられなかったマイは水道まで猛ダッシュした。水道水で口内と喉を洗浄した後、マイは再び階段裏へと駆け戻る。そこでは久本が、一人で爆笑していた。

「さすが倉科。お前ぜったい、なんか持ってるって」

「信じらんない！ レモン色はどう考えてもすっぱいんじゃないやおかしい！！」

「そこがミソなんだって。期待を裏切らないお返しだっただろ？」

久本が笑いながら言うのでマイの堪忍袋の緒が切れた。

「もう絶対久本にはチヨコあげない！」

憤慨したマイはそう言い捨て、大股で歩き出した。人影もまばらな教室に戻ったマイは肩を怒らせたまま帰り支度を開始する。しかし朝香が声をかけてきたので、マイは怒りを静めてから顔を向けた。

「マイって久本ちゃんと知り合いだったの？」

「うん。一年のとき同じクラスだったから。何で？」

朝香が微妙な表情をしていたのでマイは首を傾げて尋ねた。朝香は周囲を気にしつつ、マイの耳元に顔を寄せて答えを口にする。久本が友人である貴美子の想い人だと聞き、マイは驚きに目を見開いた。

「えー！？ そうだったの！」

「マイ、声でかい」

「あ、ごめん」

朝香にたしなめられたマイは自分の口元を手で覆った。人が少なくなっているとはいえ教室で他人の恋愛話をすることに気が引けたマイは、朝香を促して教室を後にする。先程久本と一緒に来た密談に最適な場所へと移動し、久本の姿がないことを確かめてから、マイは改めて朝香を振り返った。

「久本くん、何の用だったの？」

問いかけてきた朝香の口調に若干の疑念が感じられたので、マイは苦笑しながらあらましを説明する。この階段裏でマイと久本の間は何があったのかを知ると、朝香は苦笑いを浮かべた。

「そんなことがあったんだ」

「レモン色なのに辛いんだよ？ 信じらんない」

「アメの話はどうでもいいから」

朝香に飴の話題を素気なく流されたマイは不服に唇を尖らせた。

しかし朝香の方には取り合ってくれるような様子はない。彼女の関心は今、久本のことが好きなのだという貴美子のことへのみ向けられているようだった。

「久本くんって彼女いるの？」

朝香が本題を口にしたので、真顔に戻ったマイは眉根を寄せながら天井を仰いだ。

「いないんじゃないかな。サッカー部が全員モテると思うのは単純だとか言ってたから」

「それ、彼女がいるかってこととあんまり関係ないんじゃない？」

「私が会った時はマネージャーからの義理チョコしかもらってないって言ってたよ。その後は知らないけど」

「バレンタインが休みだったもんねえ……」

独白を零した朝香はふっと、遠い目をして顔を曇らせた。彼女がバレンタインデーに玉砕したことを知っているマイは複雑な思いで口をつぐむ。しかし朝香は、すぐに笑って見せた。

「ね、マイ。久本くんに彼女がいるか聞いてきてよ」

「えー、やだよ。校舎も違うし、わざわざ会いに行くのも変じゃん」

「マイって冷たい」

「……キミちゃんが知りたいって言うなら、考える」

「……そうだね。本人のいないところで話を進めるのは良くないよね」

「うん、良くないよ」

貴美子の意向を尊重するということ朝香との話がまとまったので、厄介なことにはならないで欲しいと思っていたマイはホッと息をつく。その後、悪ガキ然とした久本の顔を思い浮かべたマイは軽く眉根を寄せた。

「キミちゃん、久本のどこが良かったんだろう」

「頑張ってるところ、なんだって」

「……へえ」

すぐに朝香から疑問の答えを得たものの、反応を返し辛かったマイは曖昧な笑みを浮かべた。

## ホワイトデーの動機（４）

夕食を終えてリビングでテレビを見ていたら貴美子から電話がかかってきたので、マイは携帯電話を片手に二階にある自室へと引き上げた。自室の扉を開ざした後はベッドに転がって、マイは通話を開始する。

『今、大丈夫？』

「うん、平気。朝香から何か聞いた？」

すでに用件を察していたマイは貴美子の声を窺いながら慎重に問いかけた。貴美子からは肯定が返ってきたので、マイは小さく息を吐く。

「知らなかったよ、キミちゃんの好きな人が久本だったなんて」

『私もマイちゃんが久本くんと知り合いだって知らなかったから。』

隠してたわけじゃないんだけど、言わなくてごめんね』

「ううん、気にしないで。それより、久本に彼女いるか確認する？」

マイが単刀直入に尋ねると貴美子は黙ってしまった。電話越しでも迷っているような気配が感じられたので、マイの方から話を進めていく。

「バレンタインの時も迷ってたみたいだけど、告白とか考えてたりしないの？」

『久本くん、部活忙しそうだし。それに、もうすぐ三年生になるでしょ？ 言うチャンス逃しちゃったかなって思ってる』

貴美子の返事を聞き、マイの頭には受験の二文字がチラついた。加えて運動部に所属する者にとって三年生の夏は、中学生生活最後の大会があるのだ。確かに、恋愛をしている暇はないかもしれない。「だったらさ、やっぱり久本に彼女いるか聞いてくるよ。こんなこと言うのもアレだけど、もし彼女いたらキミちゃんも諦めつくかもしれないし」

『……そうだね。じゃあ、お願いしようかな』

「うん、わかった」

貴美子に頷き返しながらマイは体を起こした。インターホンが鳴り、階下から母親の呼ぶ声が聞こえてきたからである。

「ごめん、誰か来たみたい」

『あ、うん。じゃあ、また学校で』

「うん、またね」

通話を打ち切ったマイは携帯電話をベッドに放り投げ、自室を出て階下に向かった。階段を下りている途中でユウの姿を目にしたマイは驚きながら傍へ寄る。

「どうしたの？ こんな時間に」

マイが問うとユウは不服そうな表情で答えた。

「アイス、食わせてくれるって言ったじゃん」

「あ、忘れてた」

貴美子のことと頭が一杯だったマイはユウとの約束を完全に忘れていた。侘びを入れてもユウはまだ不満そうにしていたが、マイは文句を言われないうちに上がるよう促す。先に二階へ行っているようユウに言い置いてから、マイはシャーベットを取りに台所へと向かった。

「上にユウがいるから。これ食べさせたら帰す」

時刻が八時を回っていたので、マイは一応、リビングにいる母親に断りを入れた。母親はマイが手にしているシャーベットを一瞥した後、小言を言うどころか笑みを浮かべて見せる。

「そんなに急かしたらユウちゃんが可哀想でしょ？ ゆっくりしていけばいいのよ」

「……あのね、明日も学校だから」

相手がユウだと途端に甘くなる母親を軽くねめつけ、マイはリビングを後にした。自室へ戻ってユウにシャーベットの盛られた皿を渡し、マイはベッドに腰を下ろす。まだアイスを楽しむには寒い時期だったので、マイは暖房のスイッチを入れてから改めてユウを見た。

「松丸さん、喜んでくれた？」

マイにとっては自然な流れで口を突いて出た言葉だったのだが、ユウはふつと顔を曇らせる。ユウがそうした表情を見せることは珍しく、マイは驚いた。

（な、何かあったのかな？）

そうは思ったものの、ユウからは質問を拒絶するオーラが発せられていたため、マイは仕方なく沈黙を保つ。会話が途絶え、室内にはシャーベットを崩すシャリシャリという音だけが小さく響いていた。

（うわぁ……何、この空気）

自分の部屋にいるのにどうして気詰まりを覚えなければならぬのかと、マイは渋い表情をした。沈黙に耐えられなかったマイが別の話題を探していると、ユウが不意に口火を切る。

「久本と仲良かったんだ？」

ユウが唐突に妙なことを言い出したので、マイは首を傾げながら話に応じた。

「そんなに仲が良かったわけじゃないよ？」

「でも、何かもらったんじゃないの？」

「そう！ 聞いてよ！」

ユウの一言で久本の仕打ちを思い出したマイは憤慨した。マイが突然声を張り上げたのでユウはビックリしたように目を瞬かせる。しかしマイはユウの様子などお構いなしに久本から受けた嫌がらせの内容を切々と語った。ユウはポカンとしながら聞いていたが、マイの話が一段落したところで眉根を寄せて言葉を紡ぐ。

「アメ、どのくらいあったんだ？」

「うーん、二十個くらいはあったかな？」

「……運、悪すぎ」

呟いた後、ユウは笑い出した。それまでの気まずい空気が払拭されたので、マイは「まあいいか」と思いながら苦笑する。だが微妙な違和感を覚え、マイはユウに話しかけた。

「ユウは久本のこと知ってたの？」

「うん。一年の時、久本に勧誘されてたから」

「は？ ユウをサッカー部に、ってこと？」

「そう」

ユウは何でもないことのように頷いたが、彼がサッカーをしている場面をどうしても想像出来なかったマイは吹き出した。

「うわー、似合わない。ユウが運動してる姿なんて想像つかないよ」

「週二回、体育でやってるから」

「もしかして、ユウって運動神経いいの？」

「さあ？」

「よし、次の体育の時はユウを見てよう」

「……やめろよ」

心底嫌そうな顔をして、ユウは身を引いた。いつの間にかユウの態度がいつも通りになっていたので、マイは内心で安堵する。

（あっちもこっちも明るくないなあ）

人知れずため息をついたマイはそう思うのと同時に、周囲がバレンタインデーやホワイトデーで盛り上がっているのに一人だけ取り残されていることに若干の寂しさを感じて小さく肩を竦めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8185m/>

---

Loose Knot

2011年3月23日15時10分発行